

21世紀に必要な伝道

20年から30年前に効果的だった伝道方法やアプローチが今も効果的であるとは限らない。効果的に伝道するにはどうすればよいか。

デビッド・ゲスラー

現代は目まぐるしい変化の時代である。そして残念なことに多くの面でよくなっているとは言い難い。私たちの両親の時代と私たちの子どもの時代ではかなりの違いがある。多くの方が警鐘を鳴らしている。キリスト教弁証学者J. P. モーランドもその一人でこう言っている。「21世紀に向かう今、ロケットの開発者でなくても、私たちは自分たちの文化が困難に直面していることを認識することができる。すなわち、弾丸の込められた銃をたくさん見て、中は空っぽだと思っているふりをするなど、もうこれ以上続けることはできないのである。」

現代は、道徳観の拒否、宗教に対する懐疑心、客観的な真理に対する無関心や拒絶に特徴づけられている。そして、それは伝道活動にも問題を生じさせている。20年から30年前に用いられていた伝道方法やアプローチが現代にも通用するとは限らない。今日、人々は福音の事実だけをきいても、それには興味を示さない。そのため、クリスチャンが伝道をしようとする、そこには限界がもたらされる。私の教え子はシンガポールの大学キャンパスで証しをしているが、彼はこう言っている。「キャンパス・クルセードのスタッフとして私は『四つの霊的法則』や他のスキルを用いているが、それらを伝道にうまく生かせないと感じる。」人々が興味を示さない時、私ができることは、その理由を聞くこと、そしてバイブルスタディに誘うこと、自分の信仰を分かち合うことぐらいである。」今日、私は、効果的に伝道を行なっていくには、対話形式による伝道（弁証学）を訓練していくことが必要であると考えている。

さて、伝道が福音の種を蒔くことであるなら、伝道に備えることとは、種が育っていくために土を耕すことである。（第一コリント3：6）対話式伝道とは、クリスチャンが日常会話の中で証しをしていくことである。

現代では、この方法で伝道を試みていくことが大切である。なぜなら、人々の心と思いが福音の種が育っていくために十分備えられた状態であるかどうかわからないからである。他の信条を信じている人々が、私たちの信じている真理を簡単に知ることができるだろうか。東洋人も西洋人も、クリスチャンが「私たちは真理を知っている」と宣言することに

対して、高ぶり、閉鎖的だと感じ、時には、クリスチャンに対して我慢ならないと考えることがあるかもしれない。中にはキリスト教の教えていることは信じがたいと考える人もいるだろう。

聖書はこの時が来ると警告している。使徒パウロは第二テモテ4：3-4で「人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分に都合の良いことを言ってもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。」と語っている。新しい世紀では、私たちは人々に伝えるために、特に違った世界観を持っている人々に対して、伝道の橋を架けるように努めていかなければならない。このことは特に大切である。なぜなら、今日の世界では、福音は比較的伝えやすい時代にあるからである。但し、人々に福音に対する興味を引き起こすことは簡単とは言い難い。「悪いニュース」が存在することに気づかなければ、キリスト教が「グッドニュース」と宣伝しても、それに関心を示そうとしないのは当然である。文化人類学者であるジーン・ヴェイスは次のように指摘している。「道徳観は相対的なことだと信じている人々は、赦されなければならない罪はないと考えているので、このような人々に罪の赦しを伝えることは実に難しいことである。」

多くのノンクリスチャンたちは、私たちの伝えるメッセージは自分たちには関係ないこと、他のいろいろな見解と変わらないものであると考えている。このため、伝道はますます難しくなっている。中には「それは西洋の問題であって、東洋では問題ではない」と考える人もいる。けれども、残念なことに、ポストモダニズムの津波は西洋から東洋へと吹き込み、東洋の海岸に襲いかかって、途方もないインパクトを与えるに至ったのである。クリスチャン弁証学者であるラビ・ザカリアスはこう語っている。「あなたたちの生きている時代は、西洋がますます東洋化し、東洋は西洋を静かに真似ているのである。」たとえを挙げると、私がイーストアジア神学校で教えていた時の学生のひとりで、現在シンガポールの教会で働いている者がいる。ある日、彼女から緊急のEメールが届いた。そこには大学生に証しをすることの難しさが次のように綴られていた：「多くの学生は正しいことと間違っていることの基準はないと考えています。それは全く個人的なことで、個人に委ねられているので、ある人が正しいこと、間違っていることと判断する基準は、他の人とは違うのだ、ということです。このような考え方の中で、私はどのように会話を進めていけばよいかわかりません。これはあたかも、この食物は私には良いかもしれないけれど、あなたにはいいとは限らないと言っているようです。正しいこと、間違っていることは、個人の好み如何というわけです。」それから、彼女は予想もしないことを付け加えた：「私は揺り動かされてしまいました。私自身の信仰が揺り動かされているというのではなく、どのように答えてよいかわからないのです。」もし懐疑主義、多元主義、ポストモダン的考え方がこの東洋の大学キャンパスに広まっているなら、私たちは次の質問に答えなければならな

い：「ポストモダンがここにも、他の人たちの考え方にインパクトを与え始めるなら、東洋の教会は、それに答える用意ができていますか？」私たちは、多元主義やポストモダンの考え方をしている人たち、特にイエスに関する真理について聞こうとしない人たちに働きかけていくには、別のアプローチをしなければならない。私たちは旧約聖書のイッサカル族のようになる必要がある。彼らは彼らの生きている時代についてよく知り、何をすべきかを知っていた。(第一歴代誌12：32) **実際に**どういう意味かと言うと、伝道をしようにする友人に質問することで「真理が自然に表面化する」ようにするのである。それによって、自分の信じていることをの強みを評価し、そこからお互いに信じていることの共通点を福音への架け橋を築いていく必要がある。福音を私たちが共通して分かち合うことのできるものとして近づけていく橋渡しをしていくことである。(第一コリント9：22)

新約聖書を見ると、イエスと弟子たちは伝える相手によって違う質問を投げかけているが、これは特にユニークなアプローチと言うものではない。イエスは実際、質問をするのがとても上手であった。たとえば、ある支配者がイエスにこう質問したことがある。「尊い先生。私は何をしたら、永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。」イエスは彼に言われた。「なぜ、わたしを『尊い』と言うのですか。尊い方は、神おひとりのほかにだれもありません。」(ルカ18：18-19) 祭司長と律法学者たちがどのような権威でこれらのことをしたのか尋ねた時、イエスはこう答えられた。「ヨハネのバプテスマは、天から来たのですか、人から出たのですか。」(ルカ20：2-4)

イエスは人々が自分たちの本当の状態について知ることが重要であると考えられた。たとえば、イエスが井戸のそばで女に語られていることがヨハネ4章に書かれている。彼はこの女に「**ひっくり返さないと燃えてしまうぞ。**」というような脅かしを言うことはなかった。そうではなく、彼は彼女に考えさせる質問をし、彼女の興味を掻き立てたのであった。彼は「わたしが与える水を飲むものはだれでも、決して渴くことはありません。」(ヨハネ4：14) と語られた。イエスはまた、人々に直接的に言うことが最善ではないことも知っておられた。多くの場合、イエスはたとえ話を用いて語られたが、すべての人がそれらを理解できるというわけではなかった。(マタイ13：11) また、知っていることすべてを分かち合うことが最善であるとは限らないことも知っておられた。イエスはミニストリーの**終盤にかけて**、弟子たちに「わたしには、あなたがたに話すことがまだたくさんありますが、今あなたがたはそれに耐える力がありません。」(ヨハネ16：12) と指摘した。

イエスと弟子たちは、話している相手の見解を知ること、そこから彼らを真理へと導いていくことの大切さを認識していた。たとえば、マルコ2：1-13にイエスが中風の人を癒すことが書かれているが、パリサイ人たちは神のみが罪を赦すことができる(6-7)と考えていることを知っていた。そこでイエスは中風の人に「人の子が地上で罪を赦す権

威を持っていることを、あなたがたに知らせるために。」こう言ってから、中風の人に「あなたに言う。起きなさい。寝床をたたんで、家に帰りなさい。」(10-11)」と言われた。使徒パウロも同じような対応をした。たとえば、使徒の働き28:23に書かれているパウロのユダヤ人と神を畏れるギリシャ人に対するアプローチは、イエスの生涯と死は旧約聖書の成就であるということ教えるためであった。そして、そのことはすでに彼らに受け入れられていたことであった。パウロがエピクロス派やストア派(人道主義者と多神論者)に語った時のことは使徒の働き17:22-29に書かれているが、彼は別のアプローチを試みた。彼はまずかれらの神についての考えが偽りであることについて語り始め、人としてのキリストから語り始めることはなかった。ですから、私たちが**聞き手が耳を貸すような**最善のアプローチを選択することが、特に大切である。(第一コリント9:22)
今日の伝道には課題が多いので伝道前段階をどのようにすればよいかを学ぶことは不可欠である。懐疑主義者、多元論者、ポストモダニストたちに働きかけるには、新しい皮袋に新しいぶどう酒を入れる**必要がある**ということである。(マタイ9:17) 私たちは伝道のアプローチについて再考する必要があり、人々の心と思いを備えるためにどのような問いかけをすればよいか考えなければならない。それによって、彼らが喜んで福音の種を受け入れることができる**ように**である。このことを果たしていくためには、クリスチャンの証しが大きな役割を果たすことを十分認識してもらいたい。

「伝道は訓練を受けた数少ない専門家が行うものではない。イエスに属するすべての人が果たす責任である。」 エルトン・トロブラッド

